

Kagoshima University International Center for Island Studies

# 島嶼研だより

No.84

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2022年10月

## 主な記事

国際島嶼教育研究センター・センター長就任によせて（高宮広土）	p1
学生奮闘記「同じフィールド、違う景色」（迫田光弘・伊藤嵩将棋）	p3
フィールドこぼれ話「現地調査の朝、昼、夜」（山本雅史）	p7
連載 世界島めぐり 第七回 「冠島」（渡部俊太郎）	p8

## 国際島嶼教育研究センター・センター長就任によせて

国際島嶼教育研究センター  
センター長 教授 高宮広土

3月20日突然、センター長の命が下された。2015年に奄美分室が開設され、そのポジションのために鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（以下、島嶼研）に採用された。開設当時からこの3月までは、一年のうち9ヶ月を奄美市で過ごしてきた。お陰で奄美群島のことは若干理解できたのかもしれない。しかし、この点は裏を返せば、郡元キャンパスのことはこの7年間ほとんど知る機会がなかったということである。浦島太郎は「現実（＝彼にとっては過去）の社会」を知っていたから、戻ってきた時仰天したわけであるが、自分は「現実（＝鹿児島大学）」をほとんど知らないから、浦島太郎より自分が悪いかもしれない。

ただ、漆黒の世界に放り投げられたわけでもない。河合前センター長は実に8年間（おそらく記録的な長期間）島嶼研のセンター長を務められた。この8年間に多様な苦難・困難があったことは目の当たりにしていたが、それらの苦難・困難を一つ一つ乗り越え、さらに彼は島嶼

研のルールをしっかりと敷いてくださった。まずは8年間という長期間、大変お疲れ様でした。そして衷心より、彼に感謝の意を表したい。そして、漆黒ではなく、若干光の見える世界が存在することは、彼が敷いてくれたルールがあるからであろう。このルールは実にしっかりと敷設されているので、4月に思ったことは、まずは自分がこのルールに乗っかることであろう。そしてその点に関してはこの4ヶ月、成功したかもしれない（まだ先は長いので）。センター長としての最低の目標はこのルールを次のセンター長にしっかりと引き継ぐことであろう。このことをまず目標の第1としたい。

詳細は鈴木英治特任教授の『分室だより（No.15）』に述べられているが、今年度から鹿児島大学の全学的プロジェクトミッション実現分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地域創生』の革新的融合モデル」が採択された（研究期間 令和4年度～7年度、2年延長の可能性あり）。このプロジェ

## (2) 島嶼研だより No.84

クトでは「生物と文化の多様性保全」を島嶼研が、「地域創生」を理工研が担当し、最終的にはこれらを融合したモデルを提案することが期待されている。大変大きなプロジェクトである。島嶼研の方では最大限の成果を得るために、4つの分野を設置した：「植物班」「陸上動物班」「水圏班（海域と川域）」および「地域研究班（文化・経済・産業など）」。ご存知のように奄美群島（奄美大島・徳之島）は昨年世界自然遺産に登録された。それゆえ、生物の多様性とその保全を模索することは奄美群島のみならず、鹿児島大学にとっても大変重要かつ貴重な課題である。また、ここ数十年いわれているグローバリゼーションの波は奄美群島にも押し寄せ、さらに世界自然遺産となったことによって、奄美群島の文化も島外から大きな影響を受けている。それゆえ、地域研究にも尽力する必要がある。換言すれば、このプロジェクトは奄美群島や鹿児島大学のみならず、世界に貢献できるプロジェクトなのである。第2の目標はこのプロジェクトを軌道に乗せることができるよう努めたい。

冒頭に述べたように、私は奄美分室担当として島嶼研に採用された。それまで札幌の大学に勤めつつ、20年以上奄美・沖縄諸島の先史学（文字のない時代の人々・文化の研究）を研究分野としてきた。なぜ、奄美分室のポジションに応募したか。北海道からせつせと奄美・沖縄諸島に通い、先史時代の研究を遂行して明らかになりつつあったことは、奄美・沖縄諸島の文字のない時代（ヒトが出現して）には世界的に大変稀有な文化現象があったかもしれないということであった。その世界的にとっても珍しい文化現象について、北海道を含む本土ではお話をすることは多々あった。講演の後「面白かった」などというコメントをいただくことはあったが、何か物足りなさを感じていた。ある時その

原因がひらめいた。それは、札幌にいと、この文化現象の存在を「見える化」したデータを提供して下さった奄美群島や沖縄諸島の方々に紹介する機会がほとんどなかったのである。それがフラストレーションになっていたのかもしれない。

奄美分室にやってきて、過去7年間は札幌にいた頃よりは奄美群島の方々に奄美・沖縄諸島の先史時代に関してお伝えするチャンスは特段に増加した。それは鹿児島大学などの主催・後援によるシンポジウムであったり、奄美 FM であったり、南海日日新聞や奄美新聞であったり、さらには奄美 TV であったりである。この点では奄美分室の担当になったことは幸運であったと思う（地元の多くの方々ともお知り合いになったし）。しかし、8年前にやってきた時は私の良きアドバイザーが奄美におられ、その方の協力があれば100歩から進められると確信していた。が、その翌年この方が急逝した。結局この8年で2歩進めたのだろうか、と自問自答している。最後の目標は（センター長というより利己的であるが）自分の専門分野の成果を地元の方々に少しでも還元できたら、と夢想するのである。



高宮センター長

## 学生奮闘記

### 同じフィールド、違う景色

迫田光弘・伊藤嵩将棋（鹿児島大学大学院理工学研究科理学専攻）

私たちは理工学研究科の生物学プログラムに所属している修士課程の大学院生です。修士論文の研究では、垂水市にある鹿児島大学農学部附属高隈演習林の林道の植物の花色や形の集合様式や、鹿児島市内におけるスマイレの仲間の棲み分けの様式について調査をしています。

私たちは研究室に所属してから今年で3年目になりました。3年間の中で私たちは、自分の研究の調査地以外に、地域の観察会である鹿児島植物研究会の皆様と鹿児島の各所で植物観察を定期的に行っているほか、先輩や友人と熊本、宮崎、沖縄に植物観察旅行をするなど、季節とともに変化していく植物を様々な場所と環境で見してきました。まだまだ未熟ですが、日々、植物への理解と興味を深められていると思います。中でも奄美大島での調査は自身のフィールドに向かう姿勢に大きな影響を与えた調査でした。

私たちが参加した奄美大島の調査は私たちの所属している理学部だけでなく、農学部や教育学部、総合研究博物館、共通教育センター、国際島嶼教育研究センターの方々が行っている調査です。この調査は年に数回の頻度で行われており、私たちはこれまでに3回の調査に参加し、計15日間奄美大島に滞在しました。世界遺産に登録された奄美大島の固有種や希少種を自然のままの姿で見られることは植物生態学を学ぶ私たちにとって非常に刺激的なもので、何度調査しても飽きないほど毎回新しい発見があります。

しかし、調査を通して、新しい発見があるのは奄美大島の生物の多様性のおかげだけではないことに気が付きました。

調査には育林、植物生態、植物分類、時には哺乳類、鳥類、貝類の先生も同行されます。それぞれの人が歩く場所は同じでも専門分野によって発見するものは異なります。理学部の先生方は植物の種類、生育する場所について注目されることが多かったですが、農学部の先生方は地形や木の伐採跡に注目されて、人の手が森に入ったのはいつ頃が最後なのかを教えてくださいました。また、見つける植物についてもそれぞれの目線や経験から違うものが見つかるため、人数や人の組み合わせが変わると同じプロットなのに違う発見があることも珍しくありません。

このような経験から私たちは、大人数で歩くときは、できるだけ話をすることがない人と会話や質問をしながらフィールドを歩くように心掛けています。今までと違った視点が自分の中に取り込まれることで、ぼんやりしていた景色が鮮明になっていくような心地よさがあることに気が付いたのでした。

私たちを指導してくださっている先生が、過去の雑談で「研究するには対象の知識以外にも裾野を広げることが大事」とおっしゃられたことがありました。研究の理解やアイデアにつながってくるのだそうです。他者とフィールドに出て会話することはその人の経験の一端に触れることであり、自分だけでは手の届かない「知識の裾野」を広げる一番の近道になるのではないかと考えています。



写真1：調査の様子

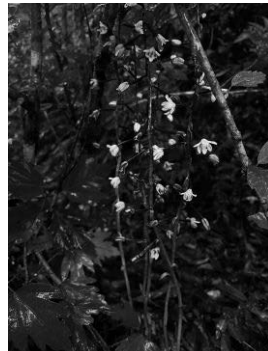


写真2：調査中に見つけたタネガシマムヨウラン  
これもひとりでは発見できなかった

## 国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 217 回

2022 年 3 月 7 日

日本列島南西縁地域の人類史研究 -ヒトの  
移動誌と文化多様性への考古学的アプローチ-  
山極海嗣  
(琉球大学島嶼地域科学研究所)

日本列島の南西には大小さまざまな島で構成される琉球列島（あるいは南西諸島や琉球弧）と呼称する地域がある。琉球列島はさらに地理的に 2~3 の地域に区分することができ、その中で最も南西縁に位置する地域は南琉球（あるいは先島諸島や宮古・八重山諸島）と呼ばれている。南琉球は沖縄諸島以北の琉球列島とも異なる文化や歴史を有しており、言語や遺伝的な特徴においても地域的な特色を持っていることが明らかにされている。こうした特徴は、南琉球の人びとが他の地域とは異なる人類史を有していたことを示唆している。特に本地域は中国大陸や台湾・フィリピンなど東南アジア島嶼部とも海を隔てて接する地理にあることから、こうした周辺地域との間での歴史的な人や文化の移動・交流が注目されており、さらに、非常に古い年代（約 3 万年前）の化石人骨が発見されたことでより古い段階からの集団的系統や起源は大きな焦点となっている。一方で、南琉球では単純な起源関係では説明が難しいユニークな文化的特徴も確認されており、これに対しては環境的な特異性や多様性とそれに対する適応的な行動といった、この地域で特異的な文化が形成される過程やメカニズムにアプローチする研究も新たに示されている。本発表では日本列島の南西縁に位置する南琉球の地域特異的な人類史と、その背景にある人の移動誌や文化多様性形成にアプローチする近年の考古学的研究や状況について紹介し、今後のより多角的な島嶼研究についての展望や議論に繋げたいと考える。



遠隔による山極海嗣氏の報告

第 218 回

2022 年 4 月 18 日

大学として離島住民の健康を守る取り組み

嶽崎俊郎

(鹿児島大学病院地域医療支援センター)

「離島住民の健康を守る」直接的な取り組みは保健医療福祉機関や行政が担っています。今回は、国際離島医療学分野在籍中に、教育と研究と通じて行ってきた「離島住民の健康を守る」取り組みを紹介します。

教育としては、全ての医学生に離島医療を学び、現場で体験してもらうことを始めました。このことにより、これまで特別なものであった離島医療が、皆が知っている離島医療になりました。さらに、地域医療を担う義務を持って入学した地域枠学生には追加の離島実習を体験してもらい、保健学科や歯学部学生にも離島実習は広がり、離島医療に直接的、間接的に関わりを持つ若い医療人が増えていきました。研究面では、奄美 5 島で生活習慣病予防のための住民ベースの疫学研究を 2005 年から開始し、2035 年まで継続します。離島で継続した研究を行うことで、地域の抱える健康課題解決の基盤となるデータと人的ネットワークが構築されるとともに、学術的にも興味ある知見が得られました。また、島嶼での研究は、研究者を育成するための魅力的な場となり、離島医療に興味を持つ若い研究者達を呼び込み、育てることができました。離島での研究基盤は、行政が抱える住民の健康課題解決に関して、大学が学術的に貢献できる場にも繋がり、多くの受託研究

を受け、解析結果を離島の行政と住民にフィードバックできました。さらに、離島は、国際的な保健医療人材育成の場にもなりました。



嶽崎俊郎氏

第 219 回 2022 年 5 月 30 日

鹿児島から東南アジアにかけた植物の多様性

田金秀一郎

(鹿児島大学総合研究博物館)

植物は世界に約 40 万種あると言われ、世界中の様々な環境に適応・分化し、一次生産者として我々の生活や生態系を支えている身近で欠かせない存在である。その一方で、我々の身の回りに生育している植物に対する理解は十分とは言えず、現在においても鹿児島から新しい植物が毎年のように発見され、世界においては毎年約 2,000 種の植物が新種として記載され続けている。

今回の発表では、日本でも指折りの植物多様性を誇る鹿児島県と世界で最も種多様性の高い熱帯雨林を擁する東南アジア地域に焦点を当て、各地域の植物の種多様性に触れ、その解明への取り組みを紹介したい。



田金秀一郎氏

第 220 回 2022 年 6 月 27 日

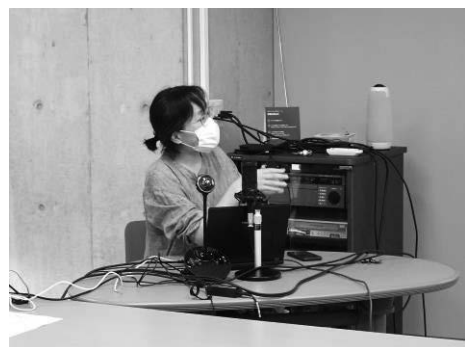
海岸植物クサトベラの種子散布に関わる  
果実二型の維持機構

榮村奈緒子

(鹿児島大学農学部)

固着性の植物にとって、種子散布は分布拡大のための唯一の手段である。個々の植物の種子は、風、水、動物などの特定の散布媒体に適した果実形態をもつ。また、散布媒体によって種子が散布されやすい環境は異なる。そのため、植物が新たな環境への侵入した場合、本来の散布媒体を失い、新たな散布媒体に適応した果実形態の獲得とともに種分化したと考えられる例が、広い分類群の植物で観察されている。しかし、このプロセスには不明な部分が多い。

海岸植物のクサトベラ(クサトベラ科)には、海流散布能力を持つ果実(コルク型)と持たない果実(果肉型)の個体間変異が分布域に広く存在し、コルク型は砂浜で、果肉型は海崖で優占する。本種のような、種子散布形質に個体間変異が存在し、その変異によって環境選好性が変化する植物は、散布形質進化に起因する種分化の初期プロセスを理解するのによい材料である。本発表では、クサトベラの果実二型が存在する維持機構を理解するために、発表者が行ってきたこれまでの研究を紹介する。



榮村奈緒子氏

第 221 回 2022 年 7 月 19 日

稍深発地震の発生領域における緑泥石の  
高圧実験とその観察

山内幸子

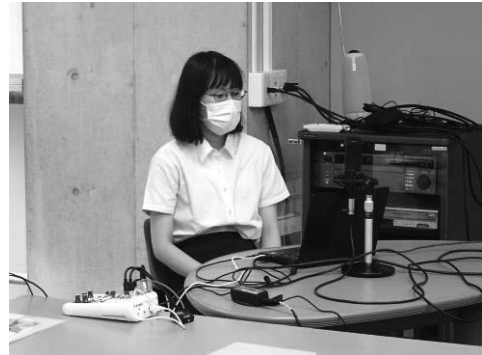
(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

## (6) 島嶼研だより No. 84

稍深発地震は、沈み込み帯のプレート内部（約 60～300km の深さ）で発生する。これは、理論上地震が起こるはずのない領域で起きており、その原因は未だ明らかにされていない。鹿児島県の島嶼部もフィリピン海プレート沿いに位置しており、1911 年には M8.0 と推定される稍深発地震が起こっている。地震の原因についていくつか有力な仮説はあるが、検証にはいたっていない。そこで、緑泥石が存在する領域と稍深発地震の発生する領域がほぼ同じであることから、緑泥石のふるまいが原因なのではないかと仮説を立てて実験を行った。今回の発表では、稍深発地震が発生する領域における緑泥石の構造変化について紹介したい。

緑泥石とは、層状に重なった緑色の鉱物である。その重なり方の違いで、性質が若干異なり、ポリタイプという細かい種類に分けることができる。緑泥石は高圧条件下で、あるとき急に一つ一つの層の重なり方がずれるような変化をすることが分かっている。この変化の中には、ポリタイプの変化を伴うものもある。また、このポリタイプの変化に伴って Acoustic

Emission(AE)という地震波に似た波の発生回数やそのエネルギーの大きさが大きくなることが分かっている。つまり、緑泥石の動きが地震波のような波を発生させているということだ。しかしこれらは室温でのデータであるので、稍深発地震が起こりうる高温高圧条件下でも不連続な構造変化や AE 活動が起こるのかを検証した。



山内幸子氏

---

## 最近の出版

---

### Occasional Papers

No.62 (December 2021)

Science of Amami: From an Island of “ Nothing ” to “ Something ”

TAKAMIYA Hiroto, SUZUKI Eizi and YAMAMOTO Sota eds.

No. 63 (March 2022)

令和 2～3 年度文部科学省特別経費（プロジェクト）

世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成活動報告書

鈴木英治・河合 溪・松田忠大・藤内哲也編

### 島嶼研ブックレット

No. 17 「魅惑の島々、奄美群島 -自然編-」 山本宗立・高宮広土（October 2021）

No. 18 「魅惑の島々、奄美群島 -社会経済・教育編-」 山本宗立・高宮広土（October 2021）

No. 19 「島ミカンを救え-喜界島ゴマダラカミキリ撲滅大作戦」津田勝男（March2022） -

No. 20 「琉球列島の河川に生息するゴカイ類」佐藤正典（March 2022）

## ～フィールドごぼれ話～

### 現地調査の朝、昼、夜

山本雅史（鹿児島大学農学部農業生産科学科）

国内、海外を問わず私が現地で調査するのは在来や自生カンキツである。現地研究者に協力してもらい、在来・自生カンキツの分布、樹体や果実特性を明らかにする。国内での調査は実施前に情報も得られやすいので、ある程度計画的に進められるが、海外の場合、特に初めての調査場所では情報も不十分なため到着するまで、どうなるかわからないことも多い。そのような場合、到着後に研究目的を説明して、それから調査計画を立案して行動することになる。ただし、当初の計画が変わることも多く、自分が一体どこに向かっているのかわからないこともある。日中は現地調査と移動が続く。樹体特性はその場で記録できるのだが、問題は果実や葉の特性の詳細な記録である。これは調査樹の正確な同定（種の決定）のために不可欠である。標準的な調査では1本の樹から約5枚の葉および5果を採取する。これをいつ調査するか。いろいろな制約があるので日本に持ち帰ることはできない。

比較的日程に余裕のあるときには、調査日を設けて大学や研究機関の実験室で特性調査が実施できる。これは最高の状況である。ただし、こういうことはあまりない。普通は限られた日程で出来るだけの調査を計画するので、滞在中はほとんどが現地調査と移動に費やされ、特性調査の日が予定できないことも多い。その場合はその日の現地調査終了後の宿泊施設到着から翌日の出発までに特性を記録しなくてはならない。簡単に言うと、夕食後または朝食前になる。夕食も簡単に済むこともあれば、長時間にわたることもある。現地調査では現地研究者だけでなく、その土地の普及員や生産者の協力を得ることも多く、その場合、お礼に夕食に誘うこともあるからだ。1点あたりの所要時間はほぼわかっているので、その日の調査点数で必要な時間が大体わかる。調査点数が増えれば増えるほど特性調査に長時間必要となるので、遺伝資源が見つかるのは嬉しいが、素直に喜べなくなってくることもある。調査に対する姿勢としては最低である。調査時刻以外にも、ホテルの部屋はテーブルが小さくて暗いことが多く、調査には向いていない。日付が変わると段々辛くなる。ホテルの屋上で朝の5時から調査したこともあったが、これは意外と良かった。

今までの最高の調査はミクロネシア・チュークのものであった。毎日午前中から昼過ぎまで現地調査。途中、ココナツで喉の渇きを癒す。ホテルの部屋であったが15時～18時頃まで葉・果実の特性の記録。夕食の後は海沿いでのビール。南の島の楽園だった。この結果は論文としても発表できた。公私ともに充実した現地調査だった。



現地での樹体調査（ミクロネシア）



ホテルの部屋での葉・果実特性調査

「世界島めぐり」  
第七回 冠島  
(Kanmuri-jima Island)

渡部俊太郎 (理学部・生物学プログラム)

冠島は京都府舞鶴市の沖合にある約 20ha の無人島である (地図、写真 1)。冠島はオオミズナギドリという海鳥の集団営巣地として 1934 年に天然記念物に指定されており、人の上陸は厳しく制限されている。こうした背景から島の大部分はタブノキ、コジイ、モチノキを中心とした照葉樹林に覆われている (写真 2)。冠島では冠島調査研究会が主催するオオミズナギドリの調査が年に 2 回行われており、筆者は 2010 年 6 月に行われた調査に参加させていただいた。島へは舞鶴の海上自衛隊の水中処分母船で渡航し、約 1 週間に渡って島内でテント生活をしながら、早朝に飛来するオオミズナギドリに足輪をつける調査などを行なった (写真 3)。冠島調査研究会の調査は継続されており、コロナ禍の中断を経て今年、2 年ぶりに生態調査が行われた。

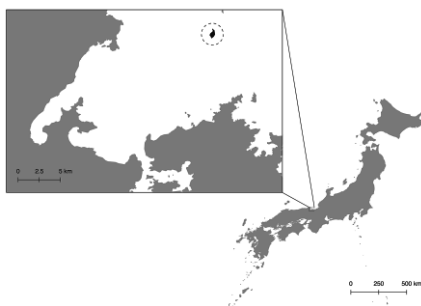


写真 1



写真 2



写真 3

編集後記

本年度から出版広報担当になりました。よろしくお願いします。(河合 溪)

島嶼研だより No.84 令和 4 年 11 月 24 日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>